

[研究ノート]

中山間農山村地域における福祉的課題とソーシャルワークとの関連に関する考察 —「農村ソーシャルワーク」という可能性—

高木 健志

Takeshi TAKAKI

要旨：本稿は、中山間地域、なかでも地理的条件に恵まれず、高齢化と人口減少といった課題面が取り上げられることの多い農山村に焦点をあてた。

まず、農山村に関する研究動向を概観した。近年のソーシャルワーク研究においては、中山間地域の高齢者の生活問題に注目した研究がある。中山間地域、とくに農山村に暮らす人びとの生活の構造や、福祉的課題の支援に焦点をあてたソーシャルワーク実践に関する調査研究の必要性が明らかになった。その結果、農山村に暮らす人びとの暮らしに焦点をあてたソーシャルワーク実践についての研究の土台的な観点、つまり、ここでは、“農村ソーシャルワーク”と措定するが、その観点から、農山村におけるソーシャルワーク実践について調査研究を通じて考えていく可能性があることを構想した。

今後の課題として、農山村に暮らす人びとの暮らしの支援に焦点をあてたソーシャルワーク実践に関する調査研究の必要性が明らかになった。

Key Words：農山村，ソーシャルワーク，農村ソーシャルワーク

はじめに

現在のわが国社会は、高齢化と人口減少という避けることのできない課題を抱えている。団塊の世代が高齢化し、さらに、若年世代をはじめとした人口減少、さらに、減少した人口が流動することで起こる都市の人口の過密と、地方の人口の過疎という極端な現象が予想されている。このようななか「選択」と「集中」の重要性が叫ばれている。経済原理としての選択と集中という考え方があることは理解できる。しかし、はたして人びとの暮らしの意識や何もかもまでもが、経済原理だけにとらわれてもいいものなのだろうか。

わが国の経済社会状況においては、貧困問題、介護問題、地域の希薄化等々の問題が都市部をはじめ全国各地で起こっている。そして、これらの問題状況は、人びとの関係が希薄だとされる都市部だけで起こっていることだとは考えにくい。つ

まり、中山間地域、なかでも農山村においても、貧困、過疎化、老老介護といった介護問題、養育困難といった子育ての問題、コミュニティの希薄化など実に様々な福祉的課題状況が複雑に絡み合っており起こっている可能性があると考えることができないだろうか。

そこで、本稿では、中山間地域、とくに交通アクセスなどの条件に恵まれない農山村における住民の生活への関心を中心にしつつ、これからソーシャルワークにどのような可能性が期待できるのか考察していく。

I. 農村における生活、暮らしとは

本章では、中山間地域等、いわゆる農山村に暮らす人びとの生活・暮らしへの関心をひらいていきたい。中山間地域、特に農山村の現状については、ひろく人口減少問題の観点から議論されてい

る。近年でいえば、「限界集落論」や「極点集中論」、「消滅集落論」などがある。他方で、人口減少問題を問題として取り上げるのではなく、むしろ、その時代に沿った社会や地域のあり方を住民とともに考え、提案することで、人口減少問題に取り組む研究(徳野 2010:松本2015)や、農山村が消滅せずに存在し続けている現状について「むら再評価論」(木下 1998:1)という観点から見直そうとする考えがある。

今日、中山間地域、特に農山村は、その状況を深刻視され、制度政策の観点から具体的な手立てが講じられてはいる。しかしまだまだ改善されるべき点があるのではないだろうか。中山間地域、農山村におけるつよみとしては、住民同士のつながり、つまり「村落共同体(鈴木 1968:3)」といった状況が挙げられてきたが、現代でもしばしば農山村におけるつよみについての議論は住民同士のつながりに頼らざるを得ないということに帰結する場合が多い。結局、そこに住む住民に農山村の存続のために重要なことがゆだねられてしまっていることが多いのが現状のひとつである。

しかし、それで、いいのだろうか。生活、暮らしの実態に関心の目を向ける必要があるのではないだろうか。

農山村における主産業としては、農業や林業がある。ここでは、農業を営む農家の生活リズムを通して、農山村における生活構造を考えてみる機会としたい。農業のうち、専業農家と兼業農家とがあることは、社会科の学習などを通してひろく知られているところである。このうち、兼業農家には、農業を主とし、そのほかの生業を従とする第一種兼業農家と、その他の生業を主とし、農業を従とする第二種兼業農家とがある。一方で、農業情勢への意識という観点から調査を行った大内による「農家の類型化を示すことは、かなりむずかしい」(大内 1992:171)という指摘がある。農家の類型化については、経済的な区分によっては可能とされるが、農家の意識という観点からの類型化は困難のようなのである。

では、農業を営む人びとがどのような生活を

送っているのだろうか。これは、専業で農業を営むAさんの初夏のある日の一日である。この一日から、農山村に暮らす住民の生活を、ほんの一面であるがみていくこととしたい。

- 5:00 起床 身支度をととのえて、田畑の見回りへ出る。
- 7:20 帰宅 このときに朝食を摂る
- 8:00 田畑へ出る いわゆる農作業を行う
- 12:00 ムラに設置されたスピーカーから響くサイレンを合図に昼食のために帰宅
- 13:00 ムラの役割のために近くの公民館へ行く
- 16:00 帰宅後、再び田畑へ向かい農作業を行う
- 18:00 帰宅し、そのまま納屋で野菜の出荷のための包装などを行う
- 20:00 夕食を摂ると、再び納屋で包装作業の続きを行う
- 22:00 一日の作業を終える

このように、農業という仕事の生活リズムは、あまり時間に余裕がない。また、季節に応じて、働く時間帯も変化し、春や秋は、気温や天候が過ごしやすい分、農作物を育てるためには、様々な仕事をこなしていかなければならない。夏は、気温が高くない早朝や夕方から、田畑に出て、作物の世話をしている。気温が高くなる日中は、農機具の調整などを行うこととなる。気温が低い冬は、夏と比べると、日中も田畑で過ごすことは可能である。しかし、夏とは対照的に、遅く日が昇り、早く日が沈むため、明るい時間には限りがあるなかで田畑の仕事をこなさなければならない。Aさんの一日にあるように、農山村では、ムラの役割がこれに加わってくることとなる。年代に応じて、その役割や所属する団体がある。例えば、小組合といった組織や若者であれば青年団、また女性であれば婦人会、これに加えて、消防団や体育部会、このほかそのムラやマチによって大なり小なり実に様々な組織が編成されている場合がある。地域

におけるつながりが強いと考えられる反面、共同体・集合として生活が構成されている側面も多いと考えられる。

では、農業の状況についてもう少し考えていくことにしたい。その一例として、熊本県山鹿市をとりあげてみよう。「山鹿市統計資料 平成26年版」によると、山鹿市の全人口は54,537人、農業従事者が7,110人である(山鹿市)。空論ではあるが、同市の全人口数を農業従事者数で単純に除法すると、1人の農業従事者は山鹿市民約7.6人分の食料を育てている計算になる。農業が市民の食に与える影響は大きいと考えても良いのではないだろうか。

また、農山村における日常生活の構造は、住民の生活の基盤が農業中心であった時代には、住まいと職場とが同じであった。しかし、今日、産業・経済状況の変化に伴って、現代の農山村の生活構造は、旧来からの農村生活とその一方で稼ぐために町に働きに出るという、いわば都市的生活とが混在している。その結果、現代の農山村では「親族共同体や地域共同体は弱体化し、個人の生活を保障する機能は弱ま」っていると考えられる(吉武 2016: 129)。生活構造の複合化という農山村の生活実態とそれによって派生する福祉的課題に、社会福祉制度はきちんと対応できているのかどうかは定かではない。また、そもそも、現代農山村における生活構造と福祉的課題の実態が明らかでないことから、これまで中山間地域、農山村における福祉に関する議論は「フォーマルサービス資源が乏しい」とか「専門家の数が足りない」といった量的拡大に着目した提言に終始せざるを得なかった。しかし、ここであらためて重要になってくるのは、全体としての資源の乏しさや条件の厳しさだけに注目することだけではなく、そこに暮らす人びとの実状をまずは理解しようとするようなのではないだろうか。

II. 農山村に関する研究

本章では、農山村への研究についての関心をひらいていきたい。中山間地域、また農山村に関する研究数について明らかにするために、先行研究

の文献数についてCiniiを用いて検索を行った。すると次のような結果であった(検索日2017年11月7日)。まず、キーワードを「地域福祉」とすると、4438件がヒットした。次に、「地域福祉+農山村」として検索すると、8件がヒットした。「地域福祉+中山間地域」というキーワードで検索を行うと、20件がヒットした。単に数値のみを取り上げて、研究動向に関して断言することはできないが、それでも、「地域福祉」に関する関心は依然として高いままであるものの、他方で、地方への関心、つまり、地方ということばがさし示す具体的な場としての「中山間地域」や「農山村」への関心はさほど高くないと推測することも可能である。つまり、地域福祉には高い関心が寄せられているが、中山間地域、農山村には関心が薄い。換言するならば、「(地域福祉の対象として農山村を)見えてはいるが、(農山村を)見ていない」状況が作りだされている可能性があるのではないかと懸念されるのである。

高野は、過疎農山村について「リアルな生活構造の変化を踏まえた」研究の必要性を指摘した上で、「過疎農山村社会の現状に対応した現実的な議論が要請されて」おり、かつ「そこに居住する高齢者自身のみならず家族にとってまで、いかなる社会福祉サービスシステムが要請され、また実現可能であるのかが明らかにされなければならない」ことを指摘している(高野 1996:49)。この指摘から、ソーシャルワーク研究においても、過疎農山村における住民の生活の実状を明らかにすること、そして、その実状に応じたいわば農山村版の地域における包括的なケアシステムの開発のための調査研究が必要であることを理解することができる。

徳野は、農村社会学、特に農業という営みを基盤としながらその生活課題を明らかにしている。徳野によると、「人口増加型パラダイムを前提とした制度やシステムが、逆に人口が減少している現実の農山村の実態と合わず、さまざまな問題を引き起こしている」としたうえでそれを「システム過疎」と名付けている(徳野 2002:16)。つまり、農山村の現実と、制度との間には、大きなギャッ

ブが生じているという指摘である。人口増加を念頭においた制度政策を考え続けていくよりも、現実を直視しつつ、どう持続可能な社会作りを考えていくのかが問われているのだと考えることができる。では、農山村は取り残されていったのだろうか。山下は、農山村で「暮らし続ける人びとの主体的決定」を中核に据える重要性を提言している(山下 2016:112)。やはり、農山村であっても、その実情に応じた制度や仕組み作りを考えていかなければならないといえるのである。

このように、社会学領域においては、暮らしという観点からも、中山間地域、とくに農山村に関心が向けられている。

Ⅲ. 社会福祉学領域における農山村で暮らす人びとへの関心

本章では、農山村における福祉的課題への研究関心をひらいていきたい。農山村についての社会福祉研究としては、これまで、「農村社会事業」や「農村福祉」がある。

大久保は、「農村社会事業論」のなかで、農村の基礎構造を「農業生産の構造、農民生活の構造、農村地域の構造」と指摘している(大久保 1949:33)。つまり、農村における社会事業計画などを立案するには、この三点からその農山村地域の状況を見極め、そしてその結果に応じて、それぞれの農山村の実状に応じた展開が必要であることを示している。しかし、既述のように、現代の農山村の住民の生活構造は、農業、林業を生計の中心とするとともに、労働に出るといえば都市的生活構造とが複合しているとも考えられる。そこで、大久保の指摘をふまえつつ、現代の農山村の生活構造の姿にそった実態の解明が必要であろう。

横山は、社会福祉協議会による組織化活動にふれながら、農村社会と社会福祉概念について論じている(横山 1952)。なかでも、横山は、日本の農村社会においてはその存続には「村本位性」と「家本位性」とが存在していることで均衡を保つことができていることを指摘している(横山 1952:59)。つまり、農村社会では、家や村の構

成員である個々人の福祉の尊重よりも、家や村というある程度の全体性のなかでのバランスをより尊重した社会システムを選択してきたといえる。

また、雑誌『社会事業』には、中野による「農村社会調査法」(1955)という論文がある。社会学者である中野が、社会福祉事業家に向けて執筆しているのであるが、農村の特徴について「家」と「家と家との関係」に依存しがちで、そのため逆にそれらによって強い拘束を受けもしている現状」は「公的な社会保障や民間団体によって行われる社会事業において、はなはだしく欠ける現在の社会的条件下では、決して解消しうるものではないことを、それによって痛感し解明しながら社会福祉事業における日本の障害の有力な一因にメスを入れることになる」(中野 1955:41)と農山村における社会事業実践と研究が、わが国の社会状況が抱える課題の核心に迫るものであるとしてその重要性を指摘している。

『日本の農村福祉』(1982)を著した田端は、「社会福祉政策が都市労働者中心である」(田端 1982:1)ものの、都市労働者を送り出す元にある「日本の農村の影響が直接あるいは間接に深くあるのではないか」(田端 1982:1)と着想している。「農村社会事業」を中心とした農村に関連する福祉の歴史的研究と当時の現状調査によって纏められているこの著書において、中心的に議論されていることは、特に農村における貧困、子育て、高齢者問題である。

野口は、農村社会事業について、その歴史的展開について研究している(野口 2017)。ここでは、農村社会事業の歴史的研究としてのこれまでの足跡について詳細に記されている。

また、社会福祉領域における農山村研究については、歴史的研究とともに、実践を志向した研究や提言も行われている。現代における農山村、近年では中山間地域ともいわれているが、中山間地域における社会福祉・ソーシャルワーク研究では、鈴木による高齢者の生活ニーズと高齢者を支援する福祉実践者に着目した研究(鈴木 2015)がある。中山間地域に居住する高齢者と支援者とに調査を

行ったこの研究では、中山間地域に居住する高齢者の医療や福祉に関するニーズをとらえている。中山間地域に居住する高齢者にとって、医療や福祉に関するニーズと支援者の支援とがマッチすることの重要性が指摘されている。

衣笠は、過疎地域を取り上げた調査を行いつつ、過疎地域のあり方として、「多面的関係性の形成と媒介」(衣笠 2010: 50)という概念を提示しつつその方向性を模索している。地域に居住する住民、ここでは特に高齢者同士であったが、住民同士という家族以外の関係性に着目することが、住み慣れた地域で暮らし続けていくことの基盤となっている状況が提示されている。

竹川は、「住み慣れた地域での交流関係を維持しつつ介護サービスも受けられる自宅以外の生活の場」を作る必要性を指摘している(竹川 2010: 17)。高齢者にとって、どこに住むのか、ということが重要な課題であることが示唆されている。農山村に暮らす人びとにとって、住民同士の関係性はおおきな影響を与えていることをうかがうことができる。

小松は、地域包括ケアシステムが過疎地域で、どのように展開できるのかということを展開するなかで、新たなしかけとして「その地域とは縁のない外部の人間」が重要な役割を果たすことを提案するとともに、「担い手の役割の見直し」が重要になることを提示している(2016: 46)。担い手としての若年層が減っていく状況のなかで、農山村における地域包括システムのためには人口減少にあわせたあり方を模索する必要があるといえる。

限界集落の住民を対象に調査した田村らの結果によると、「人生の最期まで「自宅で過ごしたい」「家族の協力が得られれば過ごしたい」「生活できるサービスがあれば自宅で過ごしたい」と考えている住民が半数近くを占めた」ことを指摘している(田村ら 2017: 56)。

竹川と田村らに共通するのは、住民は「地域住民同士のつながり」があるからこそ、過疎農山村や限界集落といわれる場所であっても、そこに住み続けたい、と考えている実状である。また、竹

川と小松の研究からは、住民同士のつながりと、住民と外から入ってくる人との関係がカギになっており、いずれも「ひとの存在」が農山村の今後を左右するであろう重要な位置を占めていることとなる。

しかし、中山間地域、特に農山村であっても、障がいや子育て困難、貧困といった福祉的支援に携わる支援者が、どのように支援を行い、またその支援実践が体系化・構造化されているのか、といった重層的な課題が横たわる中山間地域、特に農山村において福祉的支援に携わる支援者の支援の実態を明らかにした研究は筆者が浅読した限りあまり見あたらない。

現代農山村の集落がどのような生活の構造になっているのか、ということは明らかになってきているものの、具体的な状況と克服すべき生活課題、福祉ニーズ、そして、そこにソーシャルワークが具体的にどうかかわっていくのか、ということについて明らかにしていく必要が見えてくる。

IV. 農村ソーシャルワークという構想と可能性

本章では、農山村における福祉的課題への研究関心から、現代農山村における生活課題へのソーシャルワークの果たす可能性について考えていきたい。農山村における福祉的課題については、高齢化問題や人口減少を契機とした議論があるが、果たしてそれだけなのであるだろうか。村松は、1940年代にすでに「率直に言って、わが社会事業分野に於ては、余りに日本農村そのものに対する検討が成されていず、之に対する認識が欠けていすぎるのではあるまいか？」となげかけている(村松 1949: 39)。さて、この論文から60年以上経過した現在の社会の成熟を迎えているはずのわが国は、この村松のなげかけにどれほどこたえ得ることができているのだろうか。社会学者の山本は、社会病理学の可能性への期待を前提に、「農村への関心はほとんどない」(山本 1996: 100)と、農村をとらえた社会病理学研究の重要性を要請している。村松と山本のそれぞれの指摘をかけあわせれば、極端な言い方にはなるが、実は、農山村にお

ける住民の暮らしやその実状への関心は低いまま、わが国は高度経済成長を経て、今にいたってきたということになる。

これまで、一般的には、都市部と違って農山村では、人と人とのつながりが深く、助け合いが日常にあると言われている。しかし、中山間地域、特に農山村の生活構造は、大きく変化しているとも考えられ、そのため、中山間地域、特に農山村において支援を実践するにあたっては、実際にはどのような生活課題を抱え、またその解決のためにどのように支援者が関わっているのか、その実状ははっきりとは明らかにはなっていない。たとえば、地域住民と馴染みの深い支援者と、それが薄い支援者とは、同じ支援といっても、支援の質にムラが出る可能性や、実践が経験や勘に頼るほかないという事態になる可能性も考えられる。しかし、いずれにせよ、その実状ははっきりとはわかってはいない。

中山間地域、特に農山村における障がい、子育て、貧困や高齢者の介護に携わるケアラーに着目した研究などはあまり見あたらない。高木は、中山間過疎地域における精神科訪問支援における実践に着目した研究を通じて、中山間地域における精神障がい者への支援には訪問型支援が有効である可能性を持つことを示した(高木 2017)。しかし、中山間地域、特に農山村におけるさまざまな福祉的課題については、まだその問題状況の実態すら明らかではない。農山村においては、交通条件の厳しさもあるが、交通問題をどう乗り越えていくのか、という観点からの研究もある(加来 2015)。また、稲月は、一旦孤立した市民が再

び連帯していく過程に注目し、そこから「支援を通じた地域づくり」(稲月 2015: 216)という視点を提示している。このように、交通問題や、人口減少だけが農山村の問題ではなく、その実状から、あらたな方向性やビジョンは考えられ得るし、その方策を展開していくことは可能なのだといえる。

さて、蓮見は、農村における福祉問題を考えるにあたって、「農村の生活というのは、農家と非農家とを含むきわめて多様な層を内包したものである」ということになるから、そこでの生活問題というのは、単に地域的な条件からいって、都市的環境と異なる場面での生活問題ということになるであろう(蓮見 1977: 8)と指摘している。ソーシャルワークの観点から、現代の農山村の生活問題を考えることは、「農村の福祉とは一体何を意味するのか」ということについては、これまでいささか安易に言われすぎて、その内容の吟味が十分に成されてこなかった感が強い(蓮見 1977: 10)という蓮見からのメッセージに現代を担うわれわれがこたえていくことになると考えている。

そう措定するとするならば、現代の農山村における人びとが抱える生活課題とそれに呼応するためのソーシャルワーク実践とに注目した関心があっても許されるのではないだろうか。つまり、ソーシャルワークと、農村社会学・農村社会事業・農村福祉という観点とを融合させて、仮に本稿では、それを「農村ソーシャルワーク」とするが、その農村ソーシャルワークという中山間地域、とくに現代の農山村を主な関心とする構想が考えられるのである(図1)。

しかし、ここでいう農村ソーシャルワークは、



図1 農村ソーシャルワークの構想(著者作成)

「本質的には農村独自の社会事業というものはなくて、農村に於ける社会事業をそう呼んでいる」(村松 1949: 39)という村松が指摘しているように、いったん「現代農山村におけるソーシャルワーク」を関心とすることとしたい。

おわりに

今、日本の農山村は、大きく変貌している。これまで、「大家族」で、「近隣との結びつき」が強く、だからこそ「田舎は住みよい」というイメージが根強くあった。都会からの移住も促進されている。しかし、本稿で明らかにした今後の課題は、農山村の変わりゆくその実態と、一般的にイメージされる農山村ということばとのギャップを、ソーシャルワークの観点からどうとらえ、どう解決軽減策を実践していくのか、ということである。戦前の農村の生活と社会事業との関係について賀川は「農村の社会生活は、都会のやうに複雑ではないから社会事業が要らないと思へば大間違いである」(賀川 1933: 12)と指摘している。農山村におけるソーシャルワークの関心、つまり農村ソーシャルワークは、「見えているけども見えていない」わが国の社会状況を見つめる視点に通じると考えられるのである。

今後は、農山村における調査研究を行い、わが国の現代の農山村における社会状況とそれに起因する社会状況を明らかにしていくこととしたい。

謝辞 中山間地域研究に関してご指導くださった九州大学大学院人間環境学研究院教授高野和良先生に感謝の意を表します。そして、このような貴重な機会を与えてくださった山口県立大学江里理事長、長坂学長はじめ、皆様方、社会福祉学部の先生方にこの場をかりて感謝申し上げます。また、農業を営むAさんには、農家の日常生活についてご助言いただきました。

なお、本研究は科研費(科研費 15K13089)によって行った研究成果の一部である。

文献

- 蓮見音彦(1977)「農村の福祉とは何か」『農業と経済』43(5), 5-10.
- 稲月 正(2015)「第8章 地域社会と生活困窮者支援—北九州市での若年生活困窮者への伴走型就労・社会参加支援事業を事例として—」徳野貞雄監修 牧野厚史・松本貴文編『暮らしの視点からの地方再生—地域と生活の社会学—』九州大学出版, 195-221.
- 賀川豊彦(1933)『農村社会事業』日本評論社.
- 加来和典(2015)「第6章 過疎山村における交通問題—大分県日田市中津江村の事例から—」徳野貞雄監修 牧野厚史・松本貴文編『暮らしの視点からの地方再生—地域と生活の社会学—』九州大学出版, 155-174.
- 衣笠一茂(2010)「過疎地域の「生活課題」についての一考察—大分県中津市山国地区における「生活課題実態調査」の分析をもとにして(その1)〜」『大分大学大学院福祉社会科学研究科紀要』(大分大学大学院福祉社会科学研究科), 35-52.
- 小松理佐子(2016)「過疎地域における地域包括ケアシステム構築の可能性」『日本社会福祉大学社会福祉論集』134, 31-47.
- 木下謙治(1998)「農村社会学の展開と課題」『社会分析』26, 1-15.
- 熊本県山鹿市(2015)「山鹿市統計資料 平成26年版」, ([— 141 —](http://www.city.yamaga.kumamoto.jp/www/contents/1264053611077/files/tokei.pdf#search=%27%E5%B1%B1%E9%B9%BF%E5%B8%82+%E5%B9%B3%E6%88%90%EF%BC%92%EF%BC%96%E5%B9%B4%E7%89%88+%E4%BD%8F%E6%B0%91%27, 2017. 11. 7).</p>
<p>松本貴文(2015)「第3章 新しい地域社会調査の可能性」徳野貞雄監修 牧野厚史・松本貴文編『暮らしの視点からの地方再生—地域と生活の社会学—』九州大学出版, 85-108.</p>
<p>村松義郎(1949)「農村社会事業考察の一前提」『社会事業』32(10), 39-46.</p>
</div>
<div data-bbox=)

- 中野 卓(1955)「農村社会調査法」『社会事業』38(6), 35-41.
- 野口友紀子(2017)「農村社会事業はどのように理解されていたのか—1920年代から1941年までの『社会事業』から—」『社会事業史』51, 85-98.
- 大久保満彦(1949)「農村社会事業論」『社会事業』32(10), 30-38.
- 大内雅利(1992)「農業経営と農業をめぐる意識」高橋明善・蓮見音彦・山本英治編『農村社会の変貌と農民意識—30年間の変動分析—』東京大学出版.
- 鈴木榮太郎(1968)『鈴木榮太郎著作集Ⅰ 日本農村社会学原理(上)』未来社.
- 鈴木裕介(2015)「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究：地域を基盤として支援を行っている福祉専門職に対するインタビュー調査に基づいて」『社会福祉学』56(3), 58-73.
- 田端光美(1982)『日本の農村福祉』, 勁草書房.
- 高木健志(2017)「中山間地域等における訪問支援の可能性に関する研究—訪問支援の経験がある支援者へのインタビュー調査から—」『山口県立大学社会福祉学部紀要』23, 21-32.
- 高野和良(1996)「過疎農山村社会における社会福祉—社会福祉サービス利用に対する抵抗感をもとに—」『社会分析』24, 49-62.
- 竹川俊夫(2010)「過疎農山村における高齢者の生活実態と地域福祉の課題—鳥取県日南町における生活実態調査報告—」『地域学論集』7(1)(鳥取大学地域学部), 1-22.
- 田村直子・棚橋さつき・新井明子(2017)「限界集落における訪問看護ニーズと課題」『高崎健康福祉大学紀要』16(高崎健康福祉大学), 49-59.
- 徳野貞雄(2002)「過疎論のニューパラダイム」『農業と経済』10, 14-22.
- 徳野貞雄(2010)「縮小論的地域社会理論の可能性を求めて」『日本都市社会学年報』28, 27-38.
- 山本 努(1996)「社会病理学への不満と提言」, 『社会分析』24, 93-109.
- 山下亜紀子(2016)「第5章 農山村—その現状と問題の理解—」山本 努編著『新版現代の社会学的解説—イントロダクション社会学—』, 学文社.
- 横山定雄(1952)「農村社会と「福祉」の概念」『社会事業増刊』35(2), 53-64.
- 吉武由彩(2016)「第6章 福祉—高齢化と支え合う社会—」山本 努編著『新版現代の社会学的解説—イントロダクション社会学—』, 学文社.

A Consideration of the Connection between Welfare Problems and Social Work in Farming and Mountain Village Areas

～ Present Conditions in Farming and Mountain Villages and The Potential for Social Work ～

Takeshi TAKAKI

This study focuses on farming and mountain villages which are not blessed in terms of geographic location, and in which the population is aging and declining.

Firstly, this study is a survey of existing research into farming and mountain villages, and confirms that, in the field of sociology, there are already studies showing the present conditions in such villages. However, studies in the field of social welfare relating to farming and mountain villages have mostly focused on historical aspects. Moreover, recent social work studies have focused on the lifestyle issues faced by elderly people in mountain village areas. As a result, this study highlights the potential for social welfare studies focusing on practical social work for supporting the daily life of people in farming and mountain villages.

A topic for further consideration is to clarify the necessity for this kind of research in farming and mountain villages.

This work was supported by KAKENHI (15K13089).

Key words: farming and mountain villages, social work, farm village social work